平成 27 年度厚生労働省科学研究費補助金　（長寿科学総合研究事業）
「生活行為障害の分析に基づく認知症リハビリテーションの標準化に関する研究」
分担研究報告書

「精神科病院に入院したレビー小体型認知症の生活行為障害の調査」

分担研究者　北村　立
石川県立高松病院　病院長

研究協力者：塩田　繁人
石川県立高松病院　作業療法科　作業療法士

研究要旨
目的：認知症高齢者の生活行為障害について、アルツハイマー型認知症（以下、AD）はよく知られているが、レビー小体型認知症（以下、DLB）に関する報告は少ない。本研究では、精神科病院に入院した DLB 患者と AD 患者の IADL・ADL を調査・比較する。
対象は 2014 年 4 月～2016 年 3 月の間に石川県立高松病院へ初回入院した認知症患者とする。比較する項目は、認知機能は MMSE を、ADL は Barthel Index（以下、BI）を、IADL は Franchey Activities Index（以下、FAI）を用いる。また MMSE 得点により認知症の程度を Mild、Moderate、Severe の 3 群に分け、認知症の程度毎に AD と DLB の ADL、IADL を比較検討する。

A. 研究目的

認知症高齢者の生活行為は認知症の進行とともに、社会参加、IADL、ADL の順に障害されることが知られている。しかし、これらの報告はアルツハイマー型認知症を対象としており、レビー小体型認知症の生活行為の実態についてはほとんど知られていない。

レビー小体型認知症は、認知の変動やパーキンソニズムに加えて、注意や遂行機能、視覚認知などの認知機能障害を認め、早期から IADL・ADL が低下するとされている。また、生々しい幻視や睡眠障害、妄想、抑うつなどの精神症状が高頻度で発現することに加え、頻尿や便秘などの自律神経症状も多彩であり、本人のみならず介護者に身体的・精神的・社会的な負担感を与え、精神科病院への入院や施設入所の要因となっている。そこで、レビー小体型認知症の生活行為障害について調査することは、生活行為の自立に向けた効果的な支援を可能とし、在宅期間の延長や本人の QOL 向上、介護者の負担感軽減につながることが期待される。

本研究では、当院に入院した DLB 患者と AD 患者を対象として、ADL と IADL について診療録を後方視的に調査し、認知症の程度ごとに比較する。

B. 研究方法

【対象】

2014 年 4 月から 2016 年 3 月の間に当院へ初回入院した AD および DLB を対象とする。なお他病院から転院してきたものは除外する。

【方法】

調査項目は認知機能、ADL、IADL の 3 つの領域の指標を用いる。認知機能の評価として MMSE を用い、ADL は汎用されている BI を、IADL は FAI を用いる。当院ではこれらを担当作業療法士が入院日または入院 1 週以内に本人または家族・介護者へのインタビューにて測定している。

認知症の程度については、神谷ら（2014）の報告を参考に、MMSE 合計スコアをもとに、Mild：23-18 点、Moderate：17-12 点、Severe：11-0 の 3 群に分ける。

（倫理面への配慮）

本研究は当院倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：15001）。個人情報には十分配慮し、得られたデータは匿名化して、院内の PC に保管し、外部へは持ち出さない。学会等で発表、論文として公表する際には、個人が特定されないように十分に配慮する。

C. 研究結果

現在データ収集中である。

D. 考察

現在データ収集中である。

E. 結論

現在データ収集中である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

(国内)

口頭発表　6 件

原著論文による発表　2 件

それ以外(レビュー等)の発表　2 件

そのうち主なもの(それぞれ5件以内、著者名は全て記入し、班員名には下線を引く。)

1. 論文発表

1) 北村　立:目指せ！日本のアドミラルナース－石川県立高松病院・認知症訪問看護チームの紹介－. 全国自治体病院協議会雑誌, 54(6):139-142

2) 塩田繁人、杉本優輝、稲口葉子、村井千賀、北村　立:精神科病院における認知症高齢者に対する作業療法. 作業療法ジャーナル, 49:685-691.2015.

3) Tatsuru Kitamura, Shinnichi Tochimoto, Maki Kitamura, Shuhei Madachi, Shoryoku Hino. :Outcomes of Inpatients Treatment for Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia in Alzheimer's Disease Versus Dementia With Lewy Bodies. Prim Care Companion CNS Disord.2015;17(0):doi:10.4088/PCC.15m01785

4) Shinichi Tochimoto, Maki Kitamura, Shoryoku Hino, Tatsuru Kitamura : Predictors of home discharge among patients hospitalized for behavioral and psychological symptoms of dementia. Psychogeriatrics, 2015.Apr27.doi:10.1111/psyg.12114

2. 学会発表

1) 塩田繁人、杉本優輝、稲口葉子、柴田克之、北村　立:認知症高齢者の生活機能と家族の介護負担感との関連性～精神科病院入院時の調査から～. 第 49 回日本作業療法学会, 神戸市, 2015.6.20.

2) 塩田繁人、稲口葉子、杉本優輝、大西昌江、山川透、北村真希、北村　立:河北郡市の認知症支援ネットワーク～BPSD の予防や対応に焦点を当てて～. 第 53 回全国自治体病院協議会総会・研修会、帯広市、2015.08.27.

3) 北村　立:認知症の治療とケア　―生活機能の視点から BPSD をマネジメントする―. 日本認知症ケア学会 2015 年度北陸・甲信越地域大会, 金沢市, 2015.10.04.

4) 北村　立:生活障害としての認知症.地域包括ケア・イノベーションフォーラム第 10 回ワークショップ, 東京, 2015.10.07.

5) 北村　立, 神川繁利, 北村真希, 佐野滋彦, 日野昌力:超高齢認知症入院患者の臨床的特徴.第 34 回日本認知症学会学術集会, 青森市, 2015.10.02.

6) 北村　立:地域における一般科医療と精神科医療－認知症医療における精神科の役割－. 第 35 回日本社会精神医学会, 岡山市, 2016.01.29.

H. 知的所有権の出願・取得状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし